

大宰府条坊跡

第139次発掘調査

筑紫野市文化財調査報告書

第 41 集

1994

筑紫野市教育委員会



序

筑紫野市は北部九州沿岸地域と内陸部とを結ぶ中継地点として、太古より発展を遂げてまいりました。市域には各時代のさまざまな遺跡が静かに眠っておりますが、開発の名の下に数多の遺跡が破壊の危機に瀕しているのも現状であります。ともすれば忘れがちなことではありますが、文化財を伝え残していくことは未来へ向けて生きる私たちの当然の責務であり、さらにその保護に一層の努力を重ねていく所存でございます。

最後になりましたが、例年はない天候不順のなか発掘作業に従事していただきました方々、御協力を賜りました関係各位の皆様方に心よりお礼申し上げます。

平成6年3月31日

筑紫野市教育委員会
教育長 永渕 正敏

例言

1. 本書は、筑紫野市教育委員会が実施した筑紫野市大字塔原496番地に所在する遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘に係る遺構実測・写真撮影・出土遺物の実測・製図は小鹿野亮が担当し、遺物写真については山村淳彦氏に御指導を賜った。
3. 挿図の北は真北を示す。
4. 出土遺物の実測図と写真の番号は同一である。なお、遺物写真の縮尺は不統一である。
5. 本書の執筆はⅠを渡邊和子が、Ⅱ～Ⅳを小鹿野が担当し、編集については渡邊の指導の下、小鹿野が行なった。

本文目次

I. 調査に至る経過	頁 1	Ⅲ. 調査の概要	2・3
Ⅱ. 位置と環境	1	Ⅳ. まとめ	3

挿図目次

第1図 調査地点周辺地形図 (S=1/5,000)	頁 1	第5図 SD-1 出土土器実測図 (S=1/2)	3
第2図 遺構配置図 (S=1/200)	2	第6図 出土土器実測図 (S=1/1・ 1/2・1/3・1/4)	4
第3図 SD-1 断面図 (S=1/40)	3	第7図 周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)	6
第4図 SD-3 平面図・断面図 (S=1/40)	3		

I. 調査に至る経過

筑紫野市大字塔原496番地に共同住宅を建築予定の渡辺俊幸氏より文化財の所在の有無についての照会がなされ、平成4年5月19日に試掘調査を実施し、遺構面を確認した。申請者に事前に発掘調査の必要性を通知するとともに協議を行なったが、計画変更することで協議を終えていた。平成5年4月に近隣の調査中に、再度調査をしてほしい旨の協議があり、内部で協議し同時併行的に調査を開始することとし、同年4月26日付で埋蔵文化財発掘調査の委託契約書を締結するとともに進行中の136次調査と併行して調査を開始した。

発掘調査の組織

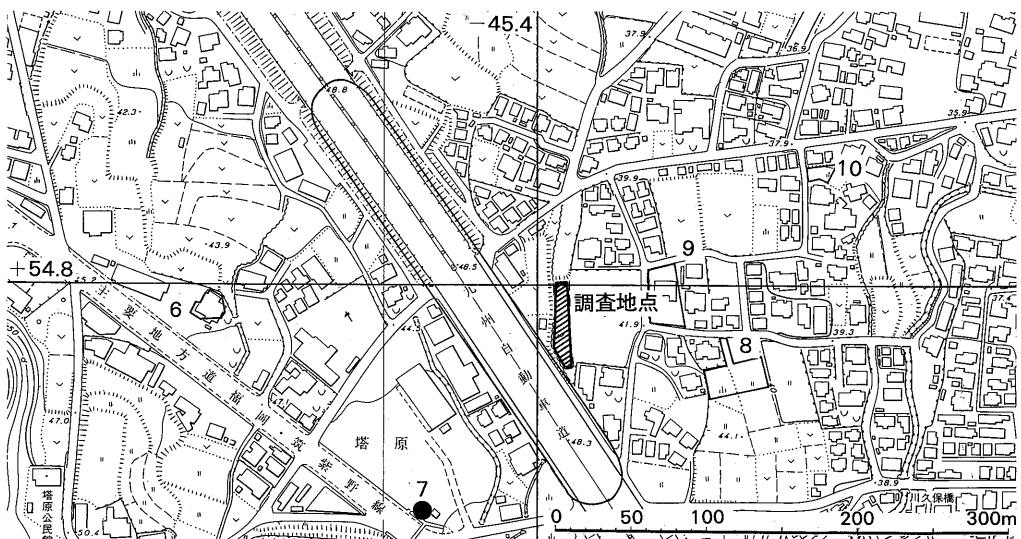
調査主体	総括	教 育 長	永 淵 正敏
	庶務	教 育 部 長	永 田 晋一
		社会教育課	課長 黒田 未宣
		文化財担当	係長 山野 洋一
			技師 渡邊 和子
	試掘調査		主事 奥村 俊久
	発掘調査	筑紫野市教育委員会	技師補 小鹿野 亮

II. 位置と環境

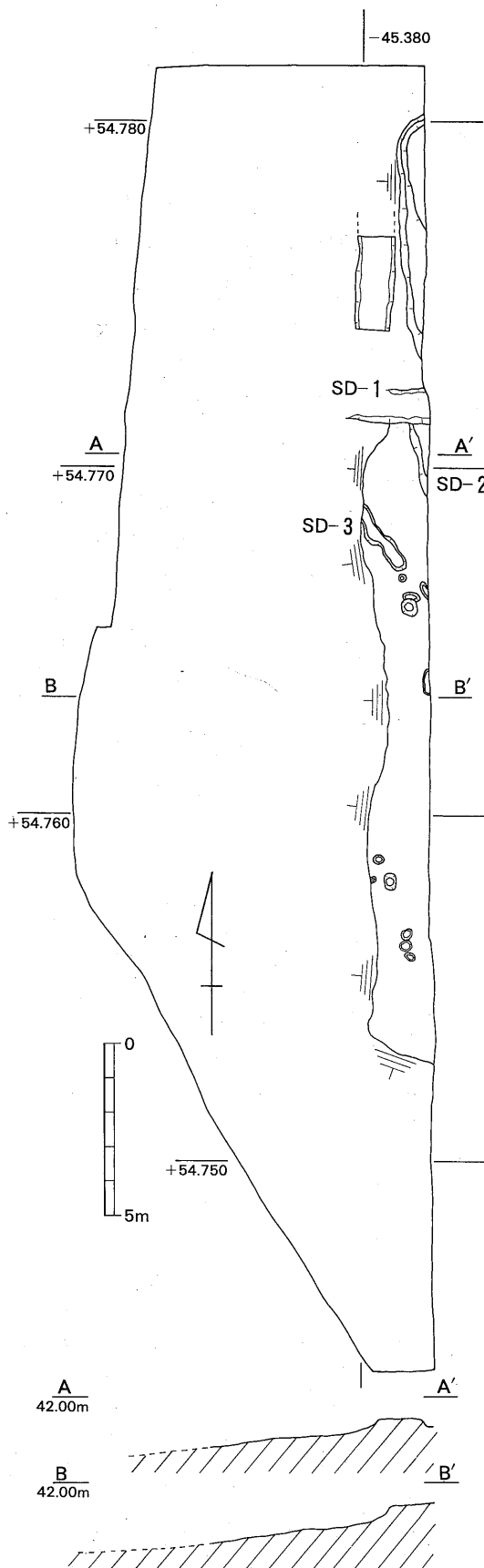
調査区は、背振山塊東端の天拝山（標高257.6m）から東に延びる微高地上に立地している。
^{註1} また鏡山猛氏の推定条坊による右郭22条5坊からやや南に外れ、^{註2} 塔原廃寺のものと推定されている塔心礎から北東方向に向って約150mの地点に位置する。

註1 鏡山猛 『大宰府都城の研究』 1968年

註2 福岡県教育委員会 『塔原廃寺 福岡県文化財調査報告書第35集』 1967年



第1図 調査地点周辺地形図 (S=1/5,000)



第2図 遺構配置図 (S=1/200)

Ⅲ. 調査の概要

本調査における検出遺構は、溝状遺構 (SD) 3、ピット10である。調査区は西に向って落ちる微高地の縁辺に位置する。落ちの部分の最下層には泥炭質の黒褐色土が10~20cm堆積し、流木なども含まれていたことから、規模は不明であるが、自然流路があったことが窺える。

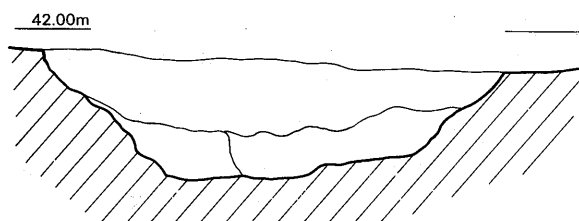
SD-1 (第3図) はN-88°-Wに主軸方向をとり、断面は逆台形、床面は平坦をなす。埋土の状態、出土遺物から新しい時期のものと考えられる。溝は東側に延びていると推測されるが、西側については掘り過ぎてしまったため、方向は確認できなかった。

SD-3 (第4図) はN-41°-Wに主軸方向をとり、幅50cm程、深さ20~30cm程である。削平されて底の部分のみ残ったと考えられ、床面は凸凹で一定でない。SD-1と同様、東に延びると推測される。

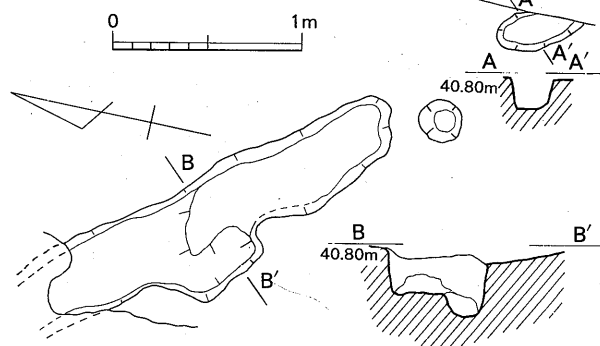
出土遺物 (第5図・第6図)

遺構に伴う遺物はSD-1埋土中からの3点(1~3)のみで、その他の遺物(4~19)は西側の落ちからの出土である。いずれも細片であったので、19点のみを図示した。

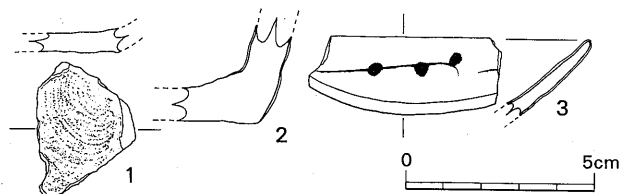
1は土師器の糸切り皿で、内面はナデを施す。2は陶器の底部。3は染付碗の口縁部で、内面に薄い藍色の梅樹文を染付する。4は白磁碗の口縁部で玉縁口縁をなす。釉は灰白色で、胎土中に0.5mm大の黑色砂粒を少し含む。6~8は須恵



第3図 SD-1 断面図 (S=1/40)



第4図 SD-3 平面図・断面図 (S=1/40)



第5図 SD-1 出土土器実測図 (S=1/2)

19は長さ11.9cm・幅7.9cm・厚さ4.4cmを測る凝灰岩製の磨石である。しかし、上・下端部に打痕が認められることから、磨石と敲石の2つの用途をもっていたと考えられる。

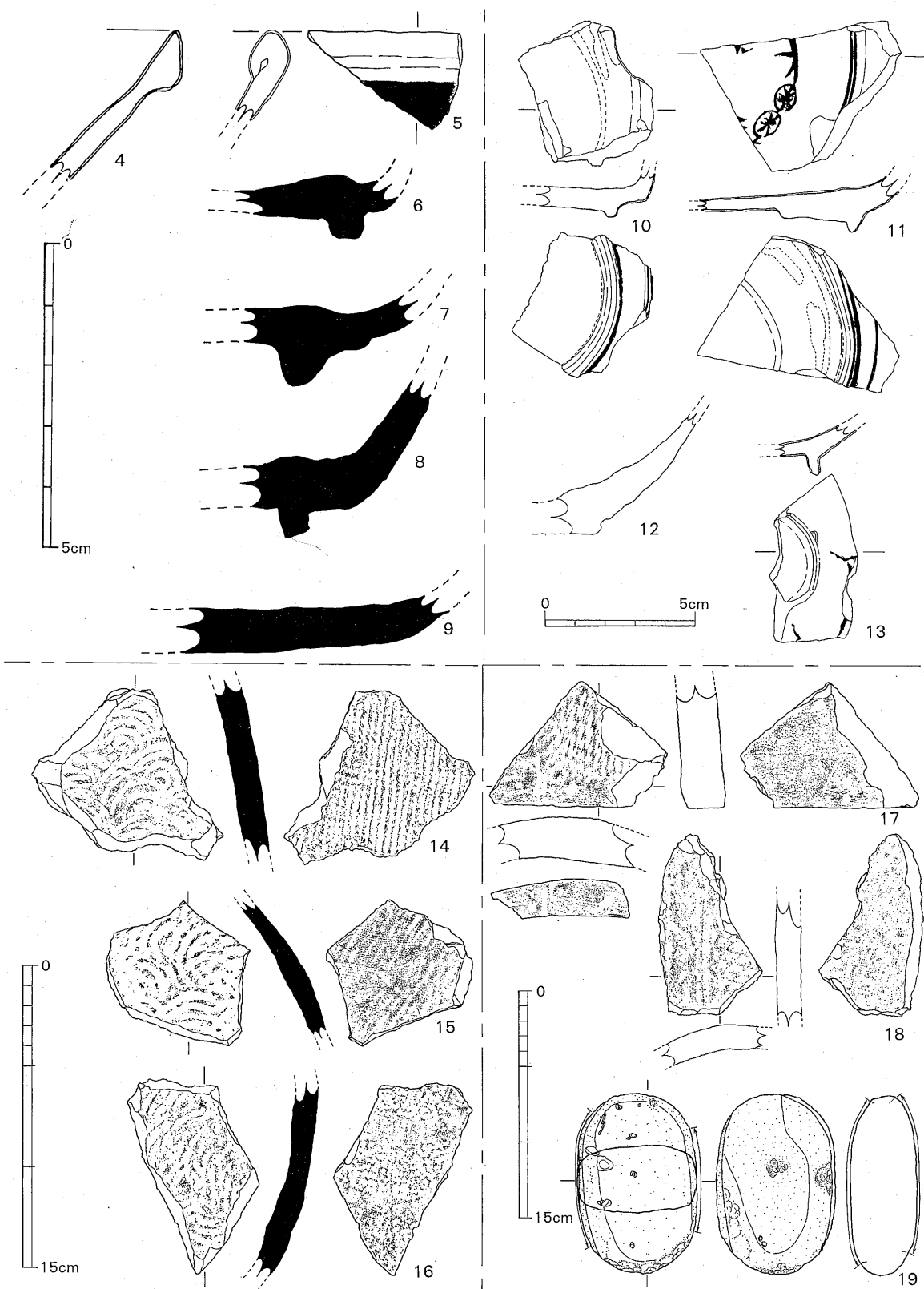
註1 九州歴史資料館『大宰府史跡 平成2年度発掘調査概報』1991年

IV. ま と め

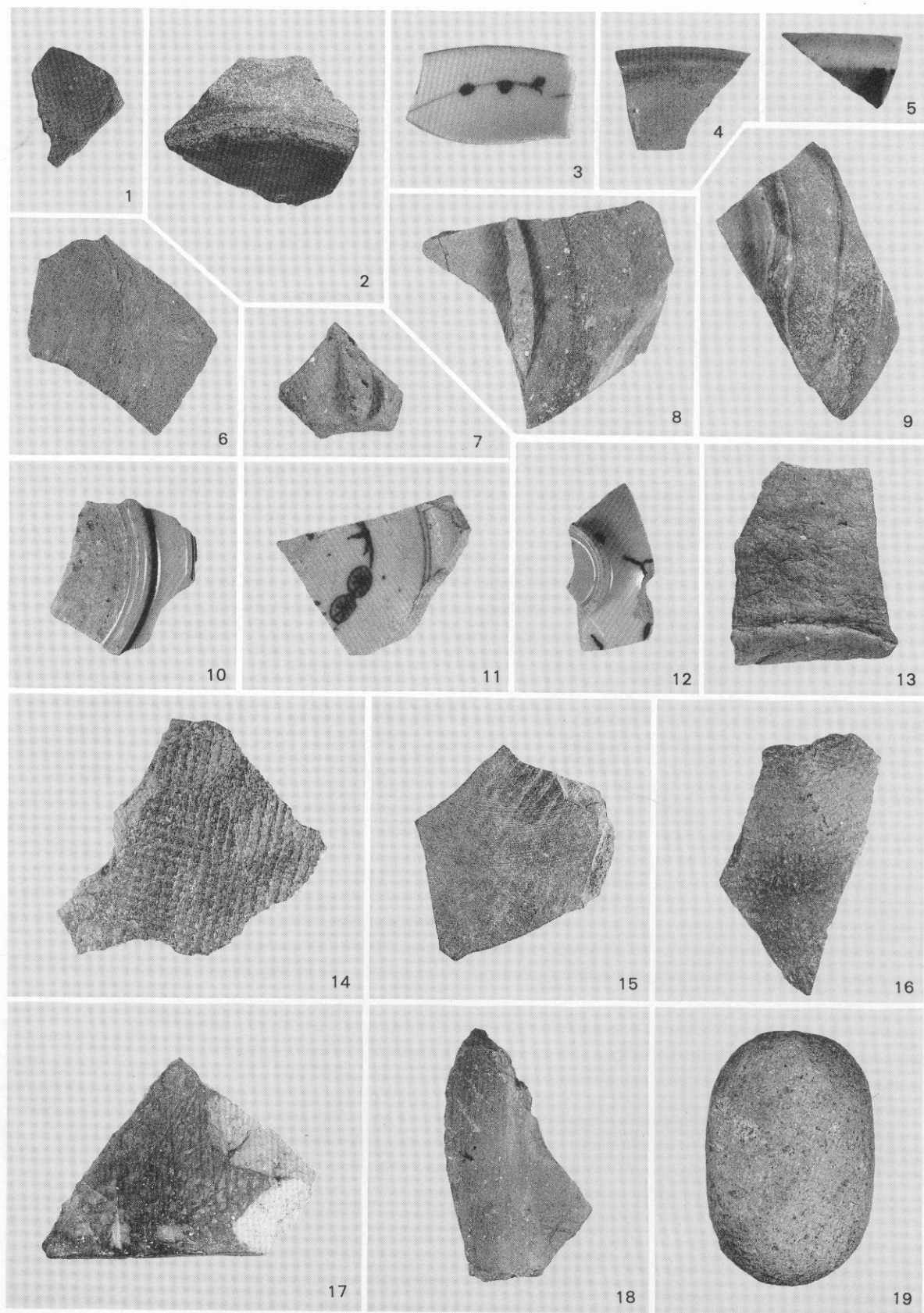
今回の調査では、西に向かって落ちていく部分に整地層が確認できなかったこと、^{註1}昭和23年頃までは付近に小川が流れており、また現在でも用水路に改修されて機能していること等から、付近の土地が田圃として利用される以前は南北方向に流れる自然流路が東西を画していたものと考えられ、今まで天拝山麓から東に延びるとされていた微高地は途中で僅かにと切れていることが分った。このことから、付近に推定されている塔原廃寺の中心は、塔心礎より西の原口池周辺に立地していた可能性が極めて高い。今後の周辺の調査が期待される。

註1 太宰府市教育委員会『太宰府古地形図』による。

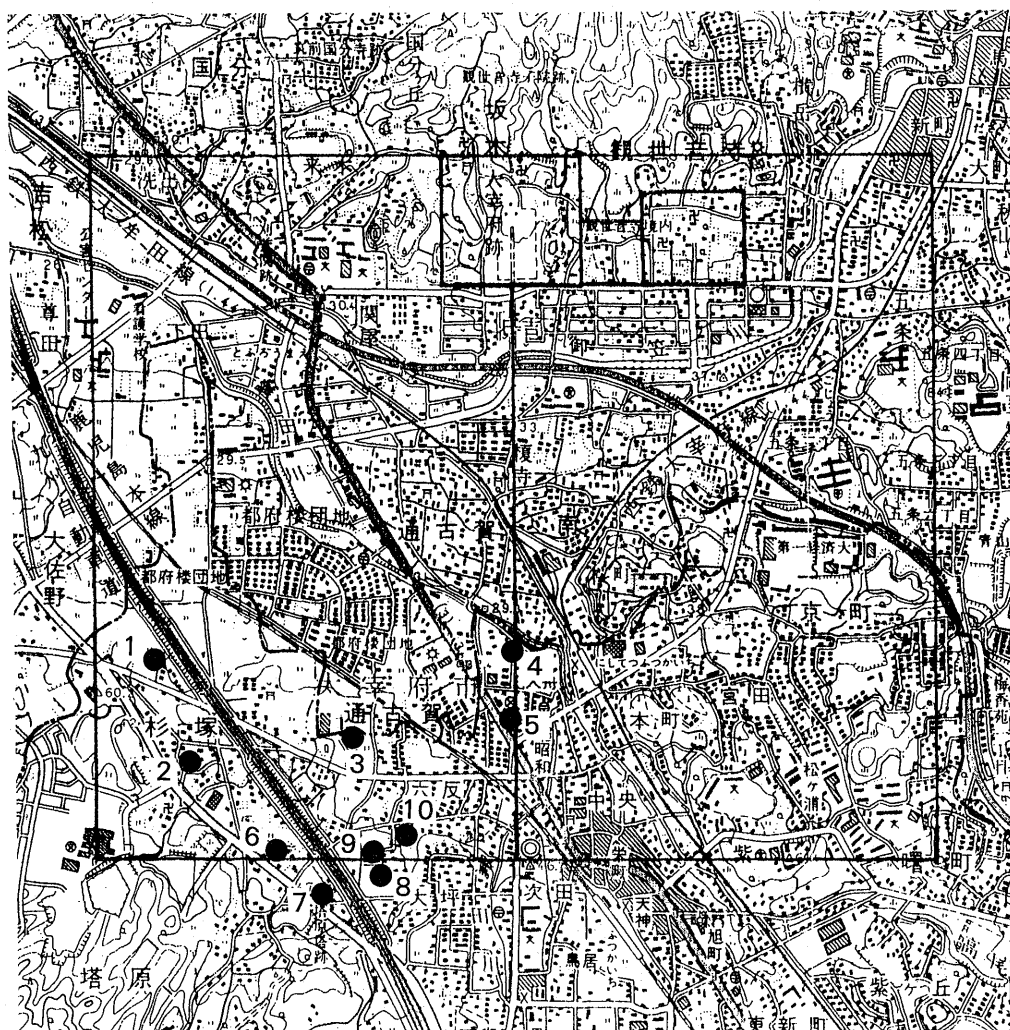
器坏身の底部で、6・7はかなり磨滅している。8は内外面にナデを施し、胴部と体部の屈曲部から1cm程内側に断面台形の高台を貼付する。14~16は須恵器甕の胴部である。15は胴上半部で、外面は擬格子目平行叩きの後横方向のカキ目、内面は青海波当て具痕が残る。14・16はいずれも外面は格子目叩き、内面は青海波当て具痕が残る。焼成は良好。10・11は染付である。10は火入の底部で、見込中央は施釉されず露胎となる。11は皿の底部で見込に松竹梅を環状に表し、蛇の目凹形高台を呈する。双方とも砂目痕が認められる。17・18は平瓦の破片で、いずれも1~2mm程の白色砂粒を多く含む。焼成は良好。17は凸面に縦方向のナデの後一部に格子目叩き、凹面は布目痕が残る。18は広端部で凸面に縄目が残るが、磨滅しており詳しい調整は不明である。^{註1}端面の仕上げはD類にあたる。



第6图 出土土器实测图 (S=1/1·1/2·1/3·1/4)



遺物写真



第7図 周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)

- | | |
|---------|----------|
| 1. 条99 | 6. 条82 |
| 2. 杉塚廃寺 | 7. 塔原廃寺 |
| 3. 条86 | 8. 条136 |
| 4. 条129 | 9. 条103 |
| 5. 条107 | 10. 条113 |

※条〇〇=大宰府条坊跡第〇〇次発掘調査地点

※第1図と第7図の遺跡番号は同一である。

大宰府条坊跡

第139次発掘調査

筑紫野市文化財調査報告書

第41集

発行 筑紫野市教育委員会
福岡県筑紫野市大字二日市753-1

印刷 株式会社 川島弘文社
福岡市東区箱崎ふ頭六丁目6-41